

## 創学舎ニュース

No.252

## いじめの周辺

(傷つきやすい心)



●現在の私は大学受験部専従で、心優しき事務の方々、定期テストの質問教室に応援に来てくれるOB達、優秀な講師達、まっすぐ育ちつつある前途有望な生徒達に囲まれ、気持ちよく仕事をさせてもらっている。

●こういう環境で仕事をしていると、「いじめ」は一体どこの世界の出来事だろうかと思ったりもする。しかし、「いじめ」はおそらく太古の昔から常に存在しているのだ。当然、「いじめめる」側の人間も「いじめられる」側の人間も、常に存在するのだ。もちろん、これからも決してなくなることはないだろう。では、どうすればよいのか。答をさがすとき、考えなければならぬ事柄の多さの前に暗澹(あんたん)たる思いになる。

●実は、私も「いじめ」にあったことがある。五月に上梓した「愛の壁」にその顛末(てんまつ)は詳しいが、小学校の入学式の翌日に「いじめ」にあって、翌日から不登校というのはギネス級かもしれない。幸い、私は教師に恵まれ、地域の人達の全体としての人柄のよさもあり、再び学校社会へと復帰するのだが、「傷つきやすい心」というのは、その時に生まれてしまった。いつも、人の顔をうかがうし、自分が受け入れてもらっているか、自分がいることが迷惑になっていないか(これは誰でもそうすることなのだ)、人一倍気に

していたように思う。(それはきっと今もそうだ。)そして、自分が拒否されていないことを確認したあと、その集団の中で孤立して人気がないかを気にする。決して上手ではないが、声をかけずにはいられない。そういう私をそばで見ていた人は、「キミは優しい奴だ。」といってくれたりしたが、多分そうではなくて、孤立している人を見るのが、自分がよく味わった孤立感を思い出させてしまうので、そのままにしておけないというだけなのだろう。

●小学校のときは、いつもおどおどしていた。一年に3、4回は泣かされていた。継続的ないじめはなく、泣かされるのも単発的だったので、それは幸運だった。でも、いつもいじめられている同級生達がいた。その中の一人は女の子で特定の男の子から「こっちに来るな。」「あっちに行け。」「笑うな。」などと、しよつちゅう言われていた。ただ、女の子たちも強くて、その女の子をいつもかばってあげていた。私はといえば、自分に、攻撃の手がまわってくるのがこわく、ただ見ているしかなかった。何も出来ない自分が情けなかったし、でも自分に攻撃がきていないことで安心もしていた。自分は、卑怯でもあったのだ。

●今もこの社会のあちこちで「いじめ」はあって、「いじめめる側」「いじめられる側」「それをただみている側」の両方の気持は、多分分かっているつもりだ。

●さて、私はいつも、おどおどしている一方で、こういう自分を変えたいと思っていた。そのためにどうすればいいのか毎日考えていた。大半は妄想だったが、とにかく今までの

自分に区切りをつけたいと思っていた。(つづく)  
(小林)

## トーチライト5

休日になると、平日にできずにたまってしまった勉強をしている。録りためていたラジオ講座を聞いたり、フランス語を筆写したり。不安が消えることはないのだが、勉強をすることで、心は少し、落ち着く。

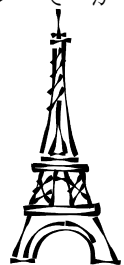


●高校生のときにどんなに笑われても、傷ついていること、気にしていることを僅かにしか見せず、ましてや言葉で本音を伝えることなどしなかった私は、いつの間にか自分を表現することに、躊躇するようになっていた。言おうと思っても止めてしまう、ということが多かった。大学に入っても、意思表示に対する戸惑いは持ち続けていたのだが、この戸惑いを英語では全く感じなかった。英語を話す授業が、大学にあった。教室内の言語が日本語ではなく、英語だったというだけで、どれほど救われたのだろう。抑圧されていた時に話していた日本語ではなく、堰(せき)を切ったように、英語で私は、自己を表現した。高校のときに英語を話してはいなかったから、深い傷を負った時にはまだ、英語を話す自分はいなかった。だから英語で積極的に発言することは、躊躇しながら日本語を話す自分とは少し異なる、新たな自分を生み出し、自己を作り上げていくことに他ならず、英語を話すこと、英語に自分の考えをのせることが、私の自己の形成につながっていった。

音がきれいそうだから、という理由で大学で第二外国語は、フランス語を選択した。どんなに勉強しても身につかないのでは、という考えが、何とかなるかもしれない、に変わったのは、ひと夏を勉強に費やした後だったように思う。もがきながら勉強を続けるうちに、フランス語もアイデンティティの確固とした一部になっていることが分かってきた。過去の苦痛を見つめていくこととする過程と、語学の学習が重なり合っていたからだろう。そして、フランス語を話す私は、日本語や英語を話す私とは、若干異なっているから。母語である日本語と必修の教科として学び始めた英語、そして自分自身で学び、話すことを選択することのできた唯一の言語であるフランス語。三つの異なる言語を話すということは、重なり、異なる三つのアイデンティティを併せ持つということであり、どれか一つでも欠けたとしたら、今の私とは随分違った私になるだろう。

勉強をし続けることでしか、自己を保ち続けることはできないのだろうか。勉強以外にも方法はあるのかもしれないが、今はまだ、分からない。唯一言えることは、仮に勉強を選択するとしたら、続けなければいけない、ということだ。勉強することが、私にとってはやはり、微力ながらも自分の力で生きるということであり、この世界で存在していく糧なのだろう。

様々な言語があったから、自己を見失うことなく生きてくることができた。闇にのまれそうになっても、溶けてしままいそうになっ



も、私は私でいることができた。自己を形成する柱となり、複数の視点に対する洞察を生み出してくれた語学学習ができたことと、それを応援し、支えてくれた方々に、感謝の意を表したい。

出口の見えないトンネルを歩いているような気がすることも依然多いけれど、それでも前方を照らすほのかな光は、常に感じている。

(武内)

# 十八のころ

私の卒業した長崎県立佐世保北高等学校は、かつては旧制一高の流れをくむ名門校で、多くの著名人が卒業生として名前を連ねている。その中に、二十代の若さで芥川賞を受賞し、現在でも文壇で活躍している作家M氏がいる。しかし、他のOB作家諸氏とは違い、彼について当時学内で教師から話を聞くことは皆無であった。というのも、彼は学生運動全盛期の在学中で、三年生のとき、学内をペンキ書きのスローガンで埋め尽くし屋上から垂れ幕をたらす「バリケード封鎖」事件を起こしたため、逮捕され無期停学となった前代未聞の生徒だったからである。私はそのことを、高校二年生の時



にあるきっかけで知った。彼がそれを小説にして出してしまったのである。地元出身の芥川賞作家が書いたその小説を、市内の書店はどこでも平積みになっていた。だから私も当然のようにそれを手にとり、初めて彼の作品に触れた。屈託のない若者のパワーを賛美し、教師をはじめとする大人たちを徹底的にカリ

カチュアする内容は、大変刺激的で、あつという間に僕を虜にした。

というわけで、M氏の熱狂的読者となった私に、奇跡ともいえるべきニュースが飛び込んでくる。彼が講演のため



に佐世保を訪れることになり、北高新聞部がインタビューをすることになったと言うのだ！即座に、私が新聞部への入部届を出したのは言うまでもない。

しかし、問題は直後、発生した。実は、校内の模試とぶつかっていたのである。インタビューに行くには、最後の国語の途中で抜け出さなければ間に合わない。模試は休めないが、M氏にはどうしても会いたい。私はぎりの選択をすることになる。

国語が始まるあたりから、私はしきりに腹を押さえて低くうなっていた。「関、大丈夫か」担任が聞いてくる。私は、辛そうに「大丈夫です」と答える。そして、30分を過ぎた頃(私は猛スピードで解答を埋めていた)私は挙手して「先生、トイレ行ってよかですか」と言い、「解答はできてるので、戻らんやったら回収してよかですけん」と付け加えて教室を出た(テストの時間は50分も残っていたが)。

私は白亜の校舎を脱走した。私立文系で時間に余裕のあるYと、小学校からの旧友である隣のクラスのTも一緒だった。肝心のインタビューは終始舞い上がってしまった、M氏もあまり真剣に答えてくれず、良い出来ではなかったが、持参した小説にサインをしてもらった私はすっかり夢見心地だった。

そのとき。私は何気なくTに尋ねたのだった。「お前どうやって模試抜けてきたの?」と。

感覚的で突飛な行動をする私と違って、Tはとても論理的で落ち着いた男で模試をサボるようなタイプではない。親は教師で家庭も厳しく、私が生徒会に立候補した時も、親は息子が私に巻き込まれるのを警戒している様子だった。思えば、一緒に来たというのは不思議な話であった。そして、彼が言った言葉に私の浮かれ気分は半分ほど吹っ飛んだ。「ああ俺？先生に理由ば話して許可もらって来たとき。」

絶句。何と言うことだ。担任に話すなんて。普通、許すわけなかやる。大体、俺が模試脱走したのがばれてしまうし、何ば考えよつとや、こいつは。でも・・・、そこまで考えて逆にハツとした。



M氏は、当然「バリ封」のせいもあるが、ある世代以上の北高卒業生に良い印象をもたれていない。その理由をあるOBから聞いた。「バリ封」の時、リーダーの彼自身は無期停学(のち復学し卒業)で済んだが、仲間の中には退学処分になった者もいたのである。つまり、仲間を犠牲にして要領よく生き残ったと解され反感を持たれているのだ。小説の中で、M氏の優秀なブレインとしてアダマという親友が登場するが、彼はバリ封のあとも自分の行為と社会との関係性に深く苦悩する。

私の中で、一瞬、その話が重なった。やつは胸張って担任と交渉したんだよな。それに比べて、こうやってこそそしている俺ってどうなの？

そうか、Tはアダマなんだ。派手な人生は望んでいないかもしれないが、こいつは、き

ちんと筋を通して生きようとしてるんだな。市井に生きる人々にこそ見出すべきものがある。高校生のときには、そんなことに気づくことすらなく、ただただ光に満ちた世界だけを夢想していたけれども、一方で、このときのTのことも忘れられない。自分をこまかさな姿勢は、自分には真似のできない尊敬に値する男の姿だった。

後日、発行された北高新聞には、M氏を囲んだ私の嬉々とした笑顔のスナップが、ほとんどが手直しを受けた記事と共に載っていた。今も高校の図書館のどこかに眠っているはずだ。



(関)

☆今号では「親子の関係」「教育名言紹介」はお休みです。

## 創学舎の本

★受験生は読め！(合格のヒケツがココにある)

●勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。

●非売品です。希望者には無料で差し上げます。

★愛の壁 ― お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

●創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

●浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他全国書店で発売中。

☆卒業や転校等で創学舎を離れ方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。